

1月1日 神の母聖マリア

民 6:22～27 ガラ 4:4～7 ルカ 2:16～21

1. ルカ

v.16 「そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。」

主の降誕にまつわる数々のおとぎ話が作られて来ました。その多くは子供たちに話すためのクリスマス物語りで、教会の子供たちによる聖劇として演じられたりして来ました。そのような文化の中で育った大人たちが、その延長線上で福音書の中の降誕物語りを解釈してしまうのは、やむを得ないことかも知れません。そのように説教が作られ、そのようにクリスマスソングが歌われて来たと言うことが出来ます。

しかし、聖書が本来語ろうとしている使信を、そしてさらに聖書を通して天上のキリストが私たちに語りかけてくださっている言葉を、現代の教会がより明確に聞くことは、私たちキリスト者の課題であります。キリスト教信仰にとって本当に必要なものは、聖書を題材にした文学作品ではなくて、聖書そのものであり、聖書についての議論ではなくて、各自が直接聖書を読むことなのです。

イエスの誕生において、神から与えられたしるしを“確かに見た”ということが、ルカ 2 章の主題であります。「マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子」は、“しるし”でありました(2:12)。神が復活させて「主とし、またメシアとなさった」(使 2:36)イエスが、確かに誕生された“しるし”を、福音書は証言しているのです(2:11)。v.20 の羊飼いたちは帰って行き、ルカ 2 章の中で「思いめぐらし」(v.19)、「驚き」(v.33)、「心配し」(v.48)ているマリアは、その後 ルカ 8:19-21 に姿を現すだけで、使 1:14 に再び登場するまで舞台から消えてしまいます。

御子は、マリアの胎内に宿る前に天使から示された名、すなわちイエスと名付けられました。

2. ガラ

vv.4-5 「しかし、時が満ちると、神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました。それは、律法の支配下にある者を贖い出して、わたしたちを神の子となさるためでした。」

聖書の使信の主題は御子イエスであって、マリアではありません。処女マリアの見事な従順と決断ではなくて、キリストのへりくだり(フィリ 2:6-11 参照)であります。マリアは“神の子の母になる最高の役割と尊厳を授けられた”(教会憲章 53)幸いな者でありました(ルカ 1:48)。しかし、このことは、“唯一の仲介者であるキリストの尊厳と効力から何ものをも取り去らず、また何ものをも付加しないという意味に解釈されなければならない”(教会憲章 62)のです。“教会はこのような従属的なマリアの役割をためらわず宣言し、絶えずこれを経験し、なおこの母の保護に支えられて、仲介者・救い主にいっそう親密に一致するよう、これを信者の心に勧める。”(同)。信者一人一人が自ら聖書に親しむことによって、公会議の諸教父たちが伝える福音を正しく理解出来るようになることが、切に求められます。

現在、日本聖書協会から発行されている“聖書 新共同訳”は、プロテスタント、カトリック両教会の共同事業として1987年に公にされたもので、教会の典礼や礼拝に用いられることを前提にして翻訳されました。この翻訳に用いられた底本は、凡例のページに掲載されているとおり、過去のプロテスタントの聖書とも、過去のカトリックの聖書とも違っていています。現在、世界各国の言語で、同じ底本による“共同訳聖書”が多数発行されていて、これはすべてのキリスト者にお勧め出来る第一級の“翻訳聖書”です。

3. 民

神の祝福は、祭司を通して、神の名によって、与えられます。「彼らがわたしの名をイスラエルの人々の上に置くとき、わたしは彼らを祝福するであろう」(v.27)とは、そういう意味です。

私たちが聖書から聞く福音は、喜びの福音であって、次のように説明されています。「わたしたちには、御自身の血によってただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられた大祭司が与えられていて、天におられる大いなる方の玉座の右の座に着き、人間ではなく主がお建てになった聖所また真の幕屋で、仕えておられるということです。」(ヘブ 8:1-2、9:12)

神は、この御子イエスを律法の下に生まれさせるために、マリアをその母としてお用いになりました。私たちはマリアにこの最高の役割と尊厳を授けられた神を賛美し、現代の教会への豊かな神の祝福を、大祭司キリストに願い求めて歩んで行こうではありませんか。

ハレルヤ、アーメン。

1月7日 主の公現

イザ 60:1~6 エフェ 3:2~6 マタ 2:1~12

1. マタ

v.2 「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。」

私たちはこの台詞を、クリスマスの降誕劇の一場面に出てくる枕詞のように考えるかも知れません。イエスはすべての人を救う“王の王”(黙 19:16)であると聞かされて来たからです。キリストは死者の中から復活して父なる神の右の座に着き、神の国の王とされました。しかしマタイ福音書は、イエスの誕生は、長く期待されていたメシアはダビデの子孫から出現するという、ユダヤ人への約束の実現であったと、証言しているのです(ルカ 1:54-55,68-70 参照)。

ユダヤ人の王としてお生まれになったメシアを、東方の学者たちが拝みに来たということが、公現の祭日の主題であります。カトリック教会は、古くから用いられて来た旧約聖書と福音書からの朗読配分をそのまま受け継いで、今も用い続けています。

2.

メシアがダビデの子孫から、ダビデの町ベツレヘムに誕生して出現するという期待は、キリスト教以前の多くの黙示文学的メシア期待の一つに過ぎませんでした。当時いろいろなメシア期待像が他にもありました。初代教会は、最初はよく分からなかったけれども、間もなくイエスのベツレヘム誕生が旧約聖書に書かれている約束の実現であったと理解するようになりました(ヨハ 12:16 参照)。それで、マルコ福音書よりも遅れて成立したマタイとルカの両福音書に、イエス誕生の経緯の物語りが登場したのだと思われます。

3世紀前半に、聖書の本文批評と聖書注解で最大の業績を残した神学者オリゲネスは、興味ある事実を伝えています。キリスト教の誕生以来、ユダヤ教は意図的に、ベツレヘムでのメシア誕生の約束(マタ 2:4-6、ミカ 5:1)を、沈黙をもって無視するようになったということです。ユダヤ教は、人々がベツレヘムの幼子イエス・キリストへの信仰を育まないように、会堂のメシア的終末待望からベツレヘムを削除してしまったのでした。

3. イザ

w.2-3 「しかし、あなたの上には主が輝き出で、主の栄光があなたの上に現れる。

国々はあなたを照らす光に向かい、王たちは射出するその輝きに向かって歩む。」

「あなた」とは、イスラエルの都シオン(エルサレム)のことです。ハガイ、ゼカリヤの努力により、またペルシア王ダレイオス一世治下の新たな時代の流れに助けられて、神殿の建築が再開された頃に(エズ 5-6章)、イザヤ 60-62章の預言が生まれたと思われます。それは「あなたたちは主の祭司と呼ばれ」(61:6)、

「エルサレムを全地の栄誉としてくださる」(62:7) という、ユダヤ教形成の始まりでありました。

しかし初代教会はこれを、キリストの救いが異邦人に顕わされる時代の到来の預言であったと理解するようになったと思われます。そしてかなり早い時期から、このテキストは主の公現の祭日のミサで朗読されるように配分されたのでした。

4. エフェ

「秘められた計画」(v.3)について、私はこれまでも再三言及して来ましたが、恐らく現代のキリスト者の大部分は、ミサの説教でこれが終末的完成の啓示として語られるのを聞いた経験がないと思われます。

新約聖書ではこれは *mysterion* という言葉で、神の救済史の完成に至る計画という意味で用いられています。これがラテン語に翻訳されたとき、*sacramentum* がその訳語として採用されました。今日七つの秘跡(サクラメント)と呼ばれているものは、ここに起源しています。

しかし、カトリック教会が秘跡(サクラメント)と呼ぶものと、新約聖書が述べる「秘められた計画」とは、完全な同義語ではありません。カトリック教会が呼ぶ秘跡とは、神の救いの計画の可視的な次元を明らかにするための言葉であり、その意味で「教会はキリストにおけるいわば秘跡、すなわち神との親密な交わりと全人類の一致のしるしであり道具である」(教会憲章 1) と言われます。

他方、新約聖書が宣教している「秘められた計画」とは、元来ユダヤ人への約束であった神の国を、キリスト・イエスにおいて異邦人が“共に受け継ぐ”という福音のことです。主の公現の祭日の主題は、まさにこの福音であります。現代の教会は再び、「あなた方は以前には肉によれば異邦人であり、……キリストと関わりなく、……約束を含む契約と関係なく、……希望を持たず、……神を知らずに生きていました」(2:11-12) という聖書の言葉に導かれて、この祭日の主題に目覚めなければなりません。そうすることによってこそ、星に導かれてはるばる東方から来て、ついに救い主を拝んだ学者たちの喜びを、私たちは今朝のミサで共にすることが出来るのです。 ハレルヤ、アーメン。

1月14日 年間第2主日

イザ 62:1～5 コリ 12:4～11 ヨハ 2:1～11

1. ヨハ

v.11 「イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。」

「しるし」という用語については、旧約聖書の背景が重要であって、そこでは神の救済史の大いなる展開を約束する言葉として用いられています(出 4:8、イザ 7:14、エゼ 4:3)。ヨハネ福音書はこれを、主イエスの生涯と死と復活によって実現した救いを指し示すという特別な意味で、特徴的に用いました。

カナでの婚礼における出来事が、ただの不思議な業、ただの目出度い奇跡ではなくて、イエスの死と復活において実現した救いと結びついて理解されるために、「わたしの時はまだ来ていません」(v.4)というイエスの言葉があるのです。「時」とは、ヨハネ福音書ではまさにこの決定的な神の御業の時を意味しているからです(12:23,27, 17:1 参照)。恐らくヨハネは、「ユダヤ人が清めに用いる石の水がめ」(v.6)に水を満たすことで、古い契約の時代が過ぎて、キリストによる新しい教会の時代が始まったことを説明しようとしていました。

ですから、「しるし」が指し示すものとは別な何かを、たとえそれが建徳的な教訓であっても、このテキストから読みとろうとする人は、的が外れているのです(6:26-27 参照)。

2. イザ

先週に続いて、エルサレム神殿再建工事の時期の、高揚した預言の言葉に注目しましょう。預言者の関心は一貫して、ヤーウェがイスラエルを贖って再び聖なる民として再建される(v.5)ということでありました。

v.5 「若者がおとめを娶るように、あなたを再建される方があなたを娶り、

花婿が花嫁を喜びとするように、あなたの神はあなたを喜びとされる。」

イエス・キリストの救いが、教会という“聖なる民の共同体”の贖いであって(使 20:28)、これに永遠の命を得させるためであるように(ヨハ 3:16)、イザヤの預言もその焦点は神の救済史の新たな展開に置かれていました。

20世紀後半の我が国のキリスト教は、キリスト教文化圏の拡張を教会の使命であるかのように誤解して来ました。そこには優れたキリスト教的文化や価値観を大衆に啓蒙するという思い上がりと、教育や医療や福祉等の面で社会に貢献するのだという優越感があって、原点である“キリストの福音によって教会を造り上げる”(使 20:32)という自らの課題を忘れていたのでした。各種の宣教活動と称するものが、ただの文化講演会や平和運動等にしか過ぎず、それに誘われて入信してみると、教会には“キリストの福音”も“聖なる民の共同体”も存在しない…… 実感出来ない、という体験を私たちは味わって来ました。

教勢の不振と教導職の後継者難という事態が深刻になって来た1980年代以降、社会への貢献度によってその存在価値を高めようという方向に、ますます我が国のキリスト教は傾斜して行きました。しかし実際には教会には実力も能力もない。そして信者たちは“飼い主のいない羊のような有様”(マコ6:34)で、だれもはや自分では“使徒継承の福音”を説明することも出来ない無知の中に……しかもそれを嘆くことさえも知らずに……放置されたままになっています。

3.1 コリ

v.7 「一人一人に“霊”の働きが現れるのは、(教会共同体)全体の益となるためです。」

主が言われた「自分を捨て、自分の十字架を負って」(マコ8:34)とは、教会共同体を捨てて、外の世界全体の益となるキリスト教になりなさいという意味ではないのです。“教会を造り上げる”ために、聖霊が信者一人一人に与えてくださっている賜物を、その目的のために先ず用いるということ、21世紀の教会は再発見しなければなりません。

西欧の教会と同じく、我が国のキリスト教も、実に瀕死の状態にあり、その実状は惨憺たるものであることを、皆が肌で感じ始めています。そこで協議されている各種対応は、まるで教会の断末魔のあがきのようになさえます。

しかし目を転じて、“教会を造り上げる”(使20:32)という原点に立ち帰ると、私たちに救済史の神の語りかけが聞こえて来ます。それは神の御業であって、人の業ではありません。

ですから、カトリック教会の信者一人一人が自ら聖書に親しんで、使徒たちが伝えたキリストの福音の宣教に直接触れることが、切に求められます。聖霊は使徒たちの宣教と共に働いて、これを聞いて信じる人々にいろいろな霊の賜物をお与えになるからです。

v.11 「これらすべてのことは、同じ唯一の“霊”の働きであって、“霊”は望むままに、それを一人一人に分け与えてくださるのです。」 ハレルヤ、アーメン。

1月21日 年間第3主日

ネへ 8:2～10 コリ 12:12～30 ルカ 1:1～4、4:14～21

1. ルカ

v.21 「そこでイエスは、“この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した” と話し始められた。」

イエスの宣教の開始を、ルカ福音書は象徴的にこの“イザ 61:1-2”の朗読で飾っています。たまたまこの二週にわたって取り上げられた、エルサレム神殿再建の頃の高揚した預言の言葉が、今やイエス・キリストの到来によって実現したと宣言されました。「貧しい人に福音を告げ知らせる……」(v.18)「主の恵みの年を告げる」(v.19) ことが、教会が宣教するキリストの福音であります。

聖書が語る“貧しい人”とは、基本的には“敬虔な人”という意味であることに注目する必要があります(1:50-55 参照)。それは“イスラエルの慰められるのを待ち望む”(2:25)、“エルサレムの救いを待ち望んでいる”(2:38)という言葉で的確に表現されているものです。典礼聖歌 28 でおなじみの“シオンを思って、わたしたちは泣いた”(詩 137:1) は、ユダヤ人の敬虔の歌でありました。

すべての異邦人をこのような信仰によるキリストへの従順へと導く(ロマ 1:5)ことが、今や教会を通して実現し始めました。なぜなら、「福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。」(ロマ 1:16)

私たちが、ミサの中の“ことばの典礼”で、“神のことばの食卓の富に豊かに与る”とは、そういうことです(典礼憲章 51,52)。しかしそれが現代のキリスト者である私たちの課題であることを、実際どれほどの人々が自覚しているのでしょうか。

2. ネへ

書記官エズラはすべての民に向かって、第七の月の一日に、律法の書を読み上げました。当時すでにヘブライ語が分からなくなっていた会衆のために、それはレビ人によってアラム語に通訳されました。この朗読は民に深い感銘を与え、一部の指導的な立場の人々のためには七日間にわたってこれが続けられました。モーセの律法の朗読と仮庵祭との結びつきは、イスラエルの古くからの伝統であります(申 31:9-13 参照)。それがユダヤの地で再び行われるようになるまでには、エルサレム神殿再建からすでに一世紀が経っていました。しかしこの律法への固執が、結果としてその後のユダヤ教の存続を保証したのでした。

その後ユダヤ教の会堂で、安息日ごとに旧約聖書が朗読され続けることが、ユダヤ人の信仰育成にとっていかに重要な役割を果たしたかは、容易に想像出来ます。それは常に、会衆がそれを聞いて理解出来るものでした(vv.2,8)。

3. Iコリ

主日のミサの“ことばの典礼”で、当日の“宣教奉仕者”(総則66)が実際に行っている朗読は、残念ながらあまり立派なものではないのが、多くのカトリック教会の実状です。本人が全くテキストの内容も前後関係も理解せずに、ただ“形式的に唱えている”に過ぎないものが殆どです。

朗読というものがあまり重要ではなくなり、現代人は好きな書籍を自分で自由に読むようになりました。“読み聞かせ”とか“朗読”というものが、ごく限られた場面でしか使われなくなって、多くの人には馴染みのないものになってしまったのです。

そのような時代に、再び信者一人一人が聖書から神のことばを聞くようになるためには、カトリック教会の意識改革が欠かせません。基本的に現代は、聖書は信者一人一人が自ら読書することによって学ぶ時代です。幼稚園の児童がおとぎ話の語り聞かせで育てられるように、聖書は教会で読み聞かせてもらうものだと考えてはなりません。自分で聖書を読まない人は、聖書を理解することが出来ず、従って神のことばを聞くことも出来ないのだという当たり前のことを、カトリック信者は認めるべきです。

主日のミサの“宣教奉仕者”は、そのような時代の朗読者であって、かつてのユダヤ教の会堂の朗読者とは役割が違います。そのような理解と自覚が、朗読者と会衆の双方に育たなければなりません。

vv.27-28「あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。神は、教会の中にいろいろな人をお立てになりました。」

主日のミサの“宣教奉仕者”が不要になったわけではありません。しかし、新しい時代に応じた主の恵みによって、宣教奉仕者にも会衆一人一人にも、それぞれふさわしい賜物が与えられるよう願い求めて行くことは、この21世紀100年をかけて教会が真剣に取り組まなければならない課題なのです。

ハレルヤ、アーメン。

1月28日 年間第4主日

エシ 1:4-5,17-19 コリ 12:31~13:13 ルカ 4:21~30

1. ルカ

v.21 「この人はヨセフの子ではないか。」

宮崎県の新知事に、タレント出身の東国原(そのまんま東)氏が当選して、ジャーナリズムは連日“成り上がり者”の彼の揚げ足取りをネタにして盛り上がっています。過去にも“タレント知事”や“作家知事”は皆、議会や県職員の敵意と非協力に例外なく悩まされたことは、よく知られています。在来の政官業の仲良しクラブ的な政治の世界が、それとは異質な知事の登場に激しく抵抗するのは、至極当然なことなのかも知れません。

ナザレでのイエスに対する同郷人の対応も、これに似ていました。自分たちと同じただの田舎者であると思っていたイエスが、会堂で聖書を「権威ある者として教えた」(マタ7:29)とき、同郷人は彼に激しく抵抗しました。「この人はヨセフの子ではないか。」

実際には、もっと不名誉な非難の言葉が投げつけられたのを、ルカ福音書はおとなしい表現に代えて伝えたように推察されます。それはナザレの同郷人の不信仰ではなくて、イエス・キリストによって今や実現し始めた救いの福音を宣教することが、この福音書の目的であったからです。vv.25-27が元来のイエスの言葉か、それともルカがイエスの口に入れた創作であるとしても、これは見事な解説であることは間違いありません。人間のあらゆる不信仰にいささかも妨げられることなく、神の救済史は確実に前進しつつあるという宣言を、私たちは今朝改めて聞いているのです。

2.

カトリック信者たちは、「真理の柱であり土台である生ける神の教会」(1テモ3:15)が、“カトリック教会の内に存在する”と教えられて来ました(教会憲章8)。教会の内に存在する福音の真理と恩恵は、それが宣教され、信者一人一人に聞かれるときに初めて、救いとなって力を発揮します(詩119:130)。

この福音を宣教し教える務めは本来、司教とこれに従属して小教区を牧する司祭たちに委ねられたものでありますが、実際には殆どその機能を発揮していません。すでに久しく、福音と教会に関する本格的な研究は、一般大学の研究者の仕事になってしまいました。このような研究者の中には、非キリスト者だけではなくて叙階された司祭や牧師も存在します。しかし後者も通常、小教区での司牧には殆ど関わっていない人々です。

ところが、主日のミサを共にささげる一般の信徒にとっては、このような謂わば“外部の権威者”が、異質なもののように見えるという、教会自身の体質があるのです。

3. エレ

ツァドクとアビアタルは、ダビデ王の時代に祭司でありましたが、二人は後継王の支持で対立し、その結果アビアタルは後継ソロモン王によってアナトの地に追放されてしまいました(王上 2:26-27)。

それから300年以上経て、この主流派ではない祭司の家系から出たのが、預言者エレミヤでありました。彼がエルサレム神殿の職業預言者たちから激しい抵抗を受けた一因は、彼がツァドク系の祭司の家の出身ではなかったからだと思われます。彼は当時の「ユダの王やその高官たち、その祭司や国の民」(v.18)の拒絶と非難の中で、神の言葉を語らねばなりませんでした。

「とこしえの愛をもって」イスラエルを「愛し」、教会に「慈しみを注ぐ」(31:3)イエス・キリストとその父なる神に「立ち帰れ」(3:14, 4:1)と呼びかける神のことばを、21世紀の教会は聞かなければなりません。そのためには、信者一人一人が自ら聖書を学ぶことが不可欠です。

4. コリ

新約聖書が語る“愛”は、“教会を造り上げる愛”、“教会共同体を愛する愛”であることを、在来のキリスト者は読みとり損ねて来たと言うことが出来ます。否むしろ、聖書を読まないから、理解出来なかったというのが正しいかも知れません。キリスト者の中で何か論議されるときにも、そこで取り上げられるのはいつも、“前後関係から切り離された聖書の断片”でしかありませんでした。

聖書を読まない信者にとって、関心事は“自分の信心”や“自分の救い”であって、“神が御子の血によって御自分のものとなさった神の教会”(使 20:28)ではありませんでした。しかし聖書は、「(教会を愛する愛という)もっと大きな賜物を受けるよう熱心に努めなさい」(12:31)という、使徒の教えを現代に伝えているのです。

過去の私たちの教会が「憤慨し、総立ちになって、町の外へ追い出し」(ルカ 4:28)て来たイエス・キリストとその福音に、21世紀の教会は悔い改めて目を注ぎ、耳を傾けなければなりません。今朝の朗読配分から、私たちが招いてくださっている神の御声を聞くことの出来る人は幸いです。

ハレルヤ、アーメン。